降誕節第２主日礼拝説教「もう捜し回らない」予稿

日本基督教団石神井教会　2022年１月２日

【旧約聖書日課】ゼカリヤ書　8章1～8節

1万軍の主の言葉が臨んだ。
2「万軍の主はこう言われる。
　わたしはシオンに激しい熱情を注ぐ。
　激しい憤りをもって熱情を注ぐ。
3 主はこう言われる。
　わたしは再びシオンに来て
　エルサレムの真ん中に住まう。
　エルサレムは信頼に値する都と呼ばれ
　万軍の主の山は聖なる山と呼ばれる。
4 万軍の主はこう言われる。
　エルサレムの広場には
　再び、老爺、老婆が座すようになる
　それぞれ、長寿のゆえに杖を手にして。
5 都の広場はわらべとおとめに溢れ
　彼らは広場で笑いさざめく。
6 万軍の主はこう言われる。
　そのときになって
　この民の残りの者が見て驚くことを
　わたしも見て驚くであろうかと
　万軍の主は言われる。
7 万軍の主はこう言われる。
　見よ、日が昇る国からも、日の沈む国からも
　わたしはわが民を救い出し
8 彼らを連れて来て、エルサレムに住まわせる。
　こうして、彼らはわたしの民となり
　わたしは真実と正義に基づいて
　彼らの神となる。

【福音書日課】ルカによる福音書　2章41～52節

41さて、両親は過越祭には毎年エルサレムへ旅をした。42イエスが十二歳になったときも、両親は祭りの慣習に従って都に上った。43祭りの期間が終わって帰路についたとき、少年イエスはエルサレムに残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。44イエスが道連れの中にいるものと思い、一日分の道のりを行ってしまい、それから、親類や知人の間を捜し回ったが、45見つからなかったので、捜しながらエルサレムに引き返した。46三日の後、イエスが神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。47聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた。48両親はイエスを見て驚き、母が言った。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」49すると、イエスは言われた。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのです

か。」50しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった。51それから、
イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった。
母はこれらのことをすべて心に納めていた。52イエスは知恵が増し、背丈も
伸び、神と人とに愛された。

クリスマスにお生まれの方はどこに？【こども説教のために】

新しい年を迎えて最初の日曜日、教会に集められてきました。まだ多くの人が自分たちの家族だけで過ごしているときかもしれません。皆さんの中には、そのような家族の集まりの中から抜け出すようにして、日曜日の教会の礼拝に進み出て来られた方もあるのではないでしょうか。

わたしたちは、クリスマスの祈りのうちに新しい年を迎えました。御子キリストが宿ってくださり、お生まれくださった、マリアとヨセフの家族の歴史に、新しい１ページを加えるためです。アドヴェントからクリスマスの祝いまで重ねてきた祈りの中で、御子イエスは、わたしたちの間でも新しくお生まれくださったことでしょう。その新しい御子の姿は、わたしたちがクリスマスの祝いの中で見てきたように、ひっそりと、周りの者の目から隠されるようにして生まれ、現れられているものかもしれません。皆さん自身が気づかないようなところで、すでに小さな飼い葉桶の中に寝かせられているのかもしれません。暗い闇夜に天使が告げるところ、遠い地から星に導かれて辿り着く小さな家、ようやく見つけた御子の小さなお姿を、わたしたちは、しっかりと目に焼き付け、心に留めておかなければ、見失ってしまうかもしれないのです。

生まれて八日目に「イエス」と名付けられた幼子は、両親マリアとヨセフのもとでお育ちになられました。ユダヤ人のごく普通の家庭で育てられたのです。両親は、幼子が生まれてひと月ほど経ったときには、新生児のための献げ物をするために神殿に詣でてもいます（ルカ 2:22 以下）。それ以来、幼子であった方は、両親と共にユダヤの祭を神殿で祝うことを習慣として身に着けられたのでしょう。いつしか、幼子から成長した少年にとって、祭ごとに詣でる神殿は、勝手知ったる我が家同然のところになっていたのに違いありません。12 歳になられて祭のために訪れたエルサレムで両親と逸れたときにも、少年イエスは、平然としていられたのです。

クリスマスにお生まれの御子イエスは、わたしたちの間でお育ちになられます。お育ちになられる御子を、わたしたちは、いつも目で追い、探さなければいけないかもしれません。見つからずに途方に暮れることが起こるかもしれません。けれども、御子は、必ず「父の家にいる」はずです。「天の父の子らの家」にいるはずです。そこにいつも立ち戻ることを、わたしたちも憶えて、歩みたいのです。

「なぜこんなことを！」

石神井教会では新年元旦の礼拝をしていませんが、多くの教会では元旦礼拝を大切にしています。中には「初詣礼拝」と名付けて、初詣代わりに元旦の礼拝に来られることを勧めている教会もあるようです。

わたしの育った教会でも、元旦礼拝が必ずありました。わたしの両親は、自分たちが 10 代から通っていた教会に通い続けていましたが、わたしが育った家はその教会から離れていたため、わたしは、小学校を卒業するまでは自宅近くの教会の日曜学校に通っていました。それでも、年に二回は、父の自家用車に乗せられて両親の教会に出席することが習慣となっていたようです。一回はクリスマス礼拝、もう一回は元旦礼拝です。新年元旦は、あまり寝坊することも無く起きると、同居していた祖父母を中心にお屠蘇を交わし、お雑煮をいただく。そして、慌ただしく車に乗せられて、教会に向かったものでした。成長して青年になってから気づいたことでしたが、その教会の元旦礼拝には、普段礼拝に来られないような家族を皆連れて来られる信者の方が、少なくなかったのです。家族がそろって教会に出席する機会としても、元旦礼拝が大切にされていたのでしょう。

主イエスの時代、ユダヤ人社会では、三大祭に合わせてエルサレムに行き、神殿を詣でることが習慣になっていたようです。一族郎党で、あるいは村を挙げて巡礼団を組み、エルサレムを訪れていたといいます。それは、家族・親族や地域共同体の絆を確かめる機会にもなっていたのではないでしょうか。その中には、幼い者もいれば年老いた者もおり、豊かな者もいれば貧しい者もいたのに違いないからです。お互いを配慮し合えなければ、巡礼団を組んで旅をすることはできません。

そのような巡礼の旅の最中に、まだひとり放っておけない少年が逸れたならば、騒ぎにならないはずがありません。両親は、少年の安否も心配したでしょうが、迷惑をかけた親族ら巡礼団一行への申し訳なさで、どれほど困惑したことかと思います。一日分の道のりを戻って迷子の少年を捜すのに、三日もかかったのです。もちろん、ようやく見つけて安堵したことでしょう。そのときには、見失った小羊を見つけた羊飼いのように抱きしめてやりたい、と思っていたかもしれません。けれども、母マリアは、そうはいたしませんでした。「**なぜこんなことをしてくれたのです**」と、思わず少年を叱責せずにはいられなかった。それは、少年が平然としていたからということもあるでしょう。そればかりか、12 歳の少年には、そのような行動が常習であったからなのではないでしょうか。そうでなければ、頭ごなしに叱ったりはしなかったはずです。もはや、少年となった我が子は、幼子のときのようには振る舞ってくれなくなっているのです。

成長する御子と共に

クリスマスの降誕物語で語られる幼子イエスを御子として知り、その命の育みに目を向けていこうとするときに、わたしたちは、この少年イエスの物語を聴くように教えられているのです。それは、これが、わたしたちの内に宿ってくださった御子がどのように育ってくださり、わたしたちに働きかけてくださるようになるのか、その道筋を示す物語であるからでしょう。

母マリア、父ヨセフが幼子を我が子として大切に育んだように、わたしたちは、クリスマスに宿ってくださる御子を、我が子のように大切に育みたいのです。幼子としてお生まれくださるというのは、神が御子をわたしたちの手に委ねてくださるということですから、わたしたちは、本当にこの御子の命を大切にしないわけにはいかない。

ところが、その幼子は、わたしたちの間で成長されるのです。わたしたちが期待するようにも成長されるでしょう。けれども、いつしか、わたしたちの手に負えないような姿にまで、幼子であった方は成長されるのです。

それでも、御子は、わたしたちの間に留まってくださるでしょう。少年イエスが、両親と一緒にエルサレムからナザレへと帰られ、なお**両親に仕えてお暮しになった**ように、幼子としてお生まれくださった御子は、わたしたちの行くところに伴って来てくださり、わたしたちのために仕え続けてくださるのです。わたしたちの間に宿ってくださる御子が、知恵を増し、大きくなり、神にも人にも愛される存在となってくださるようになるのです。

幼子としてお生まれくださった御子を、わたしたちの間で大切に育てましょう。衝突することがあってもよいのです。つまずくことがあってもよいのです。それは、わたしたちの間の御子が成長してくださっている証しです。親は、我が子の反抗期に手を焼くことがあっても良いのです。いいえ、反抗期を迎えることのない我が子、親の前で幼子のままの我が子は、むしろ心配すべきなのです。それは、我が子が本当には育っていないということなのですから。わたしたちの間で幼子としてお生まれくださる御子も、同じです。

母マリアは、生意気な口答えをする 12 歳の我が子に、腹を立てたでしょう。その言葉の意味を理解することもできませんでした。けれども、母は、その子を捨てはしませんでした。**これらのことをすべて心に納め**て、その子のことを本当に理解できるようになるときを待ち続けたのです。そのときが必ず来ることを知っていても、知らなくても、そうしたのです。そうして、我が子であったあの方のことを、一人の人として、神の人として知るようになったとき、マリアは、この出来事をすべて語って聞かせてくれたのでしょう。「御子を本当に知るようになるまでに、わたしは、こうしてこの方と向き合い続け、歩んできたのです」と。